

星川だより

熊谷空襲を忘れない市民の会 会報



ドキュメンタリー映画「熊谷空襲をどう伝えるか～記憶の継承のいま～」の一幕(監督の松田さんが熊高でスピーチの場面)



とにかくまず知ることが大事かな

3月22日、熊谷市緑化センターで映画試写会とトークイベントを開催しました。監督の松田みなみさんは、目白大学の4年生で卒業制作として熊谷空襲を取り上げました。映画は「記憶の継承」をメインに体験者のインタビューを中心に構成されています。今後 YouTube で公開されるそうなので是非ご覧ください。また、後半は、若い人たちのトークセッションを行いました。パネラーの一人、慶応大学3年生の石塚彩さんに感想を寄稿していただきました。

熊谷空襲を言語化し、伝える
ヒント

石塚 彩

本日の試写会で上映されたドキュメンタリー映画では、制作者である松田さんの「後世に継承する責任」のようなものを感じました。彼女の懸命な表

情や、証言者の方々に敬意をもつてインタビューを行う姿勢がとても印象的でした。映像の終盤、「戦争は悲惨だ、というのは簡単だが、直接体験者からお話を聞くことで得られる鮮明さがある」という言葉がありました。これは今後、継承活動を行っていくであろう若い世代が、その貴重さをおかみしめ、表現していくことのヒントになると思います。

その後のトークイベントでは、多くの視点をもつきっかけとなりました。意見を述べてくださった方々、ありがとうございます。また、私自身トークに参加させていただき、自分の考えを言語化することで、今後私ができるようにしていきたいのか、様々な立場がある中で世界はどのように動いていくべきなのかということを考え、自分事として捉えることができました。



戦跡巡りに参加して

豊里 友二

熊谷市に引越してきて3年になりますが、1年前まで熊谷にも空襲があったことを知りませんでした。知ったキツカケは米田さんの講演を聞いたことで、何度も歩いた熊谷駅から市役所に行くまでの道に中家堂石灯籠があることも気づいていませんでした。

ぜひ熊谷空襲について学びたいと話をしたところ、今回の戦跡巡りに参加させていただきました。

戦跡巡りで一番印象に残っている事は、熊谷は戦闘機のエンジンで使用するピストンリングの理研工場があったが、終戦2日前の8月13日には、熊谷高等女学校で大型攻撃機「連山」の設計をしていた海軍が居なくなっていた、という事です。彼らは日本がポツダム宣言を受諾すると知っていたのでしようか？あと1日でも早く受諾していたら、熊谷は空襲されず、熊谷市民が殺される事は無かった。政治家や高級軍人は安全な所で何をしていたんだと怒りが込み上げてきました。

熊谷は街や道が直線的なのは、焼けてしまったからとガイ

ドがあり、街並みが空襲の激しさを物語っていました。

焼夷弾は日本の木造家屋に大きな被害を与えるために作られたものと学んだ事があり、予想を上回る兵器に消化訓練など役に立たなかったと思います。そんな想像以上の火災で逃げる人々を制止する自警団が居たと言います。人の命より家屋の消火、戦争が起きると犠牲になるのはいつも市民で、政府・権力は安全な所から見ていると再確認出来ました。

テレビでは冬季オリンピックやWBCで世界で活躍する日本人が紹介されています。新たなスターが生まれた裏側では「防衛装備移転三原則」見直し提言案(5類型限定解除)がまとめられました。悲惨な戦争を経験した日本だからこそ、人を殺す武器を輸出するのではなく、人を幸せにできるスター選手を送り出して欲しいと思います。

豊里さんは、1月28日に開催した「熊谷空襲戦跡巡り」に参加された若人で、投稿をお願いしました。



中家堂の石灯籠